



もくじ

- 当院における初期研修医教育について… ①
- 診療科紹介 乳腺外科…………… ②
- 診療科紹介 糖尿病・内分泌内科…………… ③
- 部署紹介 薬剤部…………… ④



当院における
 初期研修医教育について

初期研修の重要性

臨床医の仕事には、知識や技術を習得する勤勉さ、患者さんやスタッフに対する謙虚さ、優しさ、柔軟性など多くが求められます。しかし、これらは誰もが自然と身につけているものではなく、「鉄は熱い内に打て」の言葉通り、初期研修中の教育によって土台が作られます。

当院での研修医教育の特徴

当院では基本業務を覚えるため、指導医の多い内科から研修を開始します。循環器と消化器の2グループに分けますが、総合的な視点を持てるように、ローテーションに関係なく様々な疾患を担当します。また、自ら考えて行動する自律性や救急対応力も重視し、2年目は主に救急患者を診ます。担当入院患者数は9名以下に絞り、内科全体で行う総合カンファをはじめ、多くのカンファで患者紹介をして疾患への理解を深めます。患者さんやスタッフとのコミュニケーションの取り方なども問題があれば併せて指導します。救急部では、重症患者に対し最新のガイドラインに沿った高度な医療を経験し、麻酔科では、麻酔の基本と挿管技術を学びます。そして、自由選択の7カ月間は全兵庫県立病院群から研修科を選べるため、当院の足りない部分も補うことができます。

初期研修医のマッチング状況

最近6年間は1年を除き全てフルマッチしています。ほとんどが当院を第1志望とし、高いモチベーションを持って研修に臨んで来ています。当院で後期研修をする人も増えつつあり、これからの新専門医制度のもと、加古川の地域医療に貢献してくれる優れた医師を育てたいと思います。

近隣の先生方へのお願い

臨床医のトレーニングには豊富な症例数が必要であり、近隣の先生方からの御紹介は本当に貴重です。それゆえ、至らぬところも多々あると思いますが、一層努力して参りますので今後とも多数の御紹介をお願い致します。最後に、当院の研修教育に協力していただいている県立病院群、東加古川病院、西村医院の先生方に、この場をお借りしまして心より感謝を申し上げます。



前列が1年目、後列が2年目の初期研修医

診療科紹介

乳腺外科

乳腺外科部長 佐古田 洋子

当科は主に乳がんの診断・治療を行う診療科で、日本乳癌学会の「診療ガイドライン」に基づいた専門性の高い治療を行っています。乳がん以外には、乳がんの二次検診（検診マンモグラフィで要精査とされた症例の診察）乳がんと紛らわしい良性病変や乳輪下膿瘍などの炎症性疾患の診療を行います。

乳がんは早期発見により治癒する可能性の高い疾患です。しかし実際は進行がんの状態を受診される患者さんも多く、再発率は決して低くありません。乳がん治療に伴う間質性肺炎や重症感染症、心不全などは稀でなく、肺・肝・骨・脳などの臓器転移によりさまざまな症状を引き起こします。院内外の各診療科の協力を得てこそ乳がん診療は成り立っています。

進行乳がん・再発乳がんは残念ながら根治することはできませんが、この数年で新たな治療薬が次々と保険適応となり生存期間の延長が期待されます。治療薬の選択肢が増え治療が続けられるからこそ、患者さんにとっては乳がんと「付き合う」という考え方が重要であり、私たちは患者さんが高いQOLを保ち人生を楽しめるように手助けをします。乳腺外科スタッフ一同（医師・看護師・薬剤師）は院内カンファレンスを行い患者さん一人一人に寄り添う「チーム医療」への取り組みを行っています。

外来診療について

- 待ち時間短縮と行き届いた乳がん診療のため、検診や良性病変の経過観察については近隣の先生がたにお願いしています。
- 外来受診の際は、基本的に地域連携を介した予約と紹介状持参をお願いしており、受診日に超音波検査、マンモグラフィが行えるようにしています。二次検診の受診などは予約がなくてもお受けしていますが、検査を当日中に行うことができずご不便をおかけしております。

地域医療機関の先生方へ

日ごろより多くの患者さんをご紹介いただき有難うございます。

『播磨乳腺疾患連携懇話会』では乳がんに対する理解を深めるため事例検討・情報交換を行っています。参加をご希望の皆さまにはご案内を差し上げますので地域連携室までお申し付けください。また、乳癌術後地域連携パスの運用により診療の効率化を目指しています。

今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

学会認定施設

日本乳癌学会認定施設

スタッフ紹介

佐古田洋子	昭和54年卒
石川 泰	昭和59年卒
小林 貴代	平成12年卒
小松 雅子	平成17年卒



診療科紹介

糖尿病・内分泌内科

糖尿病・内分泌内科部長 飯田 啓二

糖尿病・内分泌内科は、文字どおり糖尿病内科と内分泌内科両分野において専門医療を提供しております。若手教育にも力を入れており、最近では淡路医療センターや柏原病院などからも若手医師が一定期間当科に研修に来てくれるようになりました。5名の専攻医とともに若手医師たちが診療の中心になっています。

糖尿病診療においてはチーム医療を実践しており、治療と教育を兼ねた「教育入院」を行っております。地域の先生方からご紹介をいただき、例年130~150名の患者さん教育入院による8日間のプログラムに参加し、平成27年度は145名の患者さんに参加いただきました。当院の入院糖尿病教室の特徴としては、生活習慣改善に重点を置き、通常の講義形式の授業だけでなく、糖尿病食バイキングやカンパセッションマップを用いた指導など患者参加型の形式を取り入れています。また専門医師による患者さん個々に応じた本格的な運動指導を実施している点も大きな特徴です。退院後は、病状の安定している患者さんは地域の先生方へ逆紹介させていただき、1型糖尿病などでコントロールが難しい患者さん、インスリンポンプを使用している患者さんなどは引き続き当科外来で加療を継続しています。

内分泌診療においては、当院は播磨地域で唯一の日本内分泌学会認定教育施設、日本甲状腺学会専門医施設です。扱う疾患は多岐にわたり、下垂体、甲状腺、副甲状腺、膵内分泌、副腎、性腺疾患と全身をカバーします。専門的な緊急治療を要する入院は可能な限り受け入れています。正しい診断、治療により劇的に症状が改善するのが内分泌疾患です。疑わしい症例がありましたらぜひご紹介ください。



スタッフ紹介

千原 和夫 (非常勤)	名誉院長	昭和45年卒
大原 毅 (非常勤)	生活習慣病センター長	昭和60年卒
飯田 啓二	糖尿病・内分泌内科部長	平成5年卒
日野 泰久	糖尿病・内分泌内科部長	平成5年卒
戎谷亜希子 (非常勤)	兵庫県職員健康センター所長	平成9年卒
中村 幸子	糖尿病・内分泌内科医長	平成14年卒
山内 健史	糖尿病・内分泌内科医長	平成21年卒
石田 育大	専攻医	平成24年卒
清家 雅子	専攻医	平成24年卒
志智 大城	専攻医	平成24年卒
大西 諒子	専攻医	平成25年卒
伊藤 潤	専攻医	平成25年卒

学会認定施設

日本内科学会認定制度教育病院
日本糖尿病学会認定教育施設
日本内分泌学会認定教育施設
日本甲状腺学会認定専門医施設
日本肥満学会認定肥満症専門病院



部署紹介

薬剤部

薬剤部は、薬剤師18名、事務職員1名の19名のスタッフで、患者さまに安全で適正な薬物療法を提供することを使命とし、医師や看護師等の医療スタッフと綿密な連携をとりながら、薬剤管理指導業務をはじめ、調剤業務、医薬品情報の収集と提供、医薬品の管理・供給、がん化学療法に使用する薬剤の無菌調製などを行っています。

また、政策医療である生活習慣病（糖尿病、消化器・呼吸器疾患、がん等）、緩和医療、救命救急、感染症領域、今年度からはリウマチ領域においても薬剤師の専門性を活かし、安全・安心な薬物療法が行われるようチーム医療の充実に取り組んでおり、専門・認定薬剤師を計画的に育成し、高度な薬物療法の実践を目指しています。

外来

- 調剤 外来は院外処方箋が97.9%（平成28年7月現在）となっていますが、一部の薬（院内製剤、内視鏡検査用の薬剤など）は薬剤部で調剤し、患者さまに直接お渡ししています。
- 薬剤指導 がん化学療法を受けられる患者さまには医師の依頼により薬剤師が抗がん剤についての説明や服用中の薬の確認を行っています。

入院

● 病棟薬剤業務

当院では各病棟の薬剤サテライトに薬剤師を配置し、患者さまへの服薬指導のほか、医師や看護師への医薬品情報の提供や医療スタッフからの相談応需、個々の患者さまに応じた処方の提案、抗生物質の投与設計などを行う病棟薬剤業務を実施しています。また、退院時の薬剤指導にも力を入れ、持ち帰られる薬の説明とともに入院中に使用した主な薬や副作用がなかったかなどをお薬手帳に記載し、地域医療機関との連携が図れるよう努めています。

（写真：薬剤サテライト）



● 持参薬

入院された患者さまの持参薬は、薬の現物とお薬手帳を参照して薬剤部で鑑別を行います。鑑別した結果は、電子カルテに記載し、院内のスタッフで情報を共有して入院中の持参薬使用の適正化を図っています。

チーム医療への参画

栄養サポートチーム（NST）、ICT、緩和ケアチーム、生活習慣病チーム（肝臓病、糖尿病、足病変、動脈硬化）、プレストチームに薬剤師がスタッフとして参加しています。

当院薬剤師の各種資格認定等

NST 専門療法士、感染制御認定薬剤師、抗菌化学療法認定薬剤師、日本糖尿病療養指導士、認定実務実習指導薬剤師、日本DMAT隊員、スポーツファーマシスト等

お薬手帳持参推進へのご協力をお願いします

最近では入院される患者さまの8割近くがお薬手帳を持参されています。お薬手帳には薬局での記載のほか、クリニックでの処方内容の記入もあり、処方された先生方の意図に沿った正しい服薬を入院中にも行うために、持参されたお薬手帳を医療スタッフが必ず確認するようにしています。また、入院時だけでなく、外来診察時にも医師がお薬手帳の情報で服用中の薬を把握し、中止薬の指示を適切にできるなど、お薬手帳は診療に欠かせないものとなっています。

お薬手帳への処方内容の記載、受診・入院される際の持参の説明を今後ともよろしくお願いいたします。